

女たちが描く愛と官能のおとぎ話

メグ・ライアン主演、ニコール・キッドマン製作、
そしてジェーン・カンピオン監督による衝撃の話題作『イン・ザ・カット』。
この映画で“アメリカの恋人”が演じたものは何かを探ってみよう

金丸弘美●文 (ライター)
Text by Hiromi Kanamaru



現代人に内在する性と欲望

メグ・ライアンは、すごいところに踏み込んだ。これまでハリウッド映画では一切描かれなかった、また、避けて通られてきた、しかし、人であるならば誰もが抱える、内在する性と欲望というテーマである。そのテーマに、れっきとしたスターが挑戦したのだ。監督のジェーン・カンピオン、それに製作のニコール・キッドマンという、2人の女性の視線に共感したメグ・ライアン——『イン・ザ・カット』は、一筋縄ではいかない女性の性の存在を誰よりも知っているメンバーによって初めて成し遂げられた映画であろう。

舞台はニューヨーク。登場する4人の主要人物が、現代の都会生活、そして人の性の衝動と欲望の在り方を象徴的によく表している。

メグ・ライアン演じる主人公のフラニーは、大学の文学講師。言葉に興味があって、スラングや詩を収集している。その言葉の集め方も独特で、まるで収集したものをカラーージュしていき、言葉にならない自分の心や肉体を、なんとか形にしていこうという試みにも見える。そんな彼女は、男性に距離を置いて、言葉のように大胆になれない。相手に心も肉体も委ねる自信がない。持て余した内面の衝動や性をなんとか言葉を切り張りし、理屈を付けてみようとして試行錯誤している。そうして都会を彷徨している。

一方、腹違いの妹（ジェニファー・ジェイソン・リー）は、奔放で、男性とのセックスをいとわない。かといって、心から愛してくれる恋人はおらず、満たされない心を性によって埋めようとしているかのように見える。仲は良いが、非常に対照的な姉妹なのだ。

この姉妹の周辺で猟奇殺人が起り、捜査に現れた刑事（マーク・ラファロ）が、フラニーに接触することになる。この刑事はというと、犯罪を取り締まる立場にありながら、女性に対する性的な欲求はストレート。いつも女性と関係を持ちたいという衝動と思いがあるのだ。

そしてその傍らで、都会の中で屈折した性と欲望を猟奇という形でしか表現できない、見えない犯人がうごめいている。

女優メグ・ライアンのターニング・ポイント

こんな形で、刑事とフラニーは巡り会い、性の享楽に堕ちていく。これは、今までメグ・ライアンが演じてきた、

『イン・ザ・カット』
In the Cut

監督：ジェーン・カンピオン

製作：ニコール・キッドマン、ローリー・パーカー

キャスト：メグ・ライアン（フラニー）、マーク・ラファロ（マロイ）、

ジェニファー・ジェイソン・リー（ポーリーン）、ケヴィン・ベーコン（ジョン・グラハム）ほか

公開：2004年4月松竹・東急系にて全国ロードショー

配給：ギャガ・ビューマックス



爽やかで、スマートで、ロマンチックで、そして決まっ
てと言っていいほど、恋を夢見る人なら誰もが憧れる軽やかな
キスをして結ばれる恋の物語とはまったく異なる。刑事
とのセックスは、性そのものの快楽が全面に映し出される。
メグもマークも、どんなに言葉をつなぎ、衣装をまとうが、
隠すことのできない、誰もが持つ性の衝動、理性では
抑さえ切れない快感、肉体の持つ本能の喜び、そしてそれ
を一方で素直に表現できない戸惑い、それらすべてを、惜
しみなく肉体をさらして、大胆にあらわに表現してみせる
のである。それはセックスをかなり知って、なおかつセッ
クスというものが素直に口に出せない、とらえようのない
存在であるということを理解した上でないといけないよう

な、演技と映像表現になっている。

そうして、4人の存在を中心に、都会生活者の心に宿
る、抑圧された性衝動の行き場のないいら立ちが猟奇殺人
をめぐるミステリーと絡まって見事な展開を見せていく。

作品のテーマであるミステリーと現代人に内在する屈折
した性衝動の在り方に重ねて、メグは、おそらく彼女自身
にもあるセックスの快楽と肉体的開放への衝動と、一方で
それらが今までの役柄では常に覆い隠されてきたことへの
いら立ちを表現したかったのではないか。この映画でメグ
は、そういった本音と性の本質に踏み込んだ。その意味で
これは、彼女にとっての果敢な、そしてファンにとっても
大きなターニング・ポイントとなるだろう。 [E]